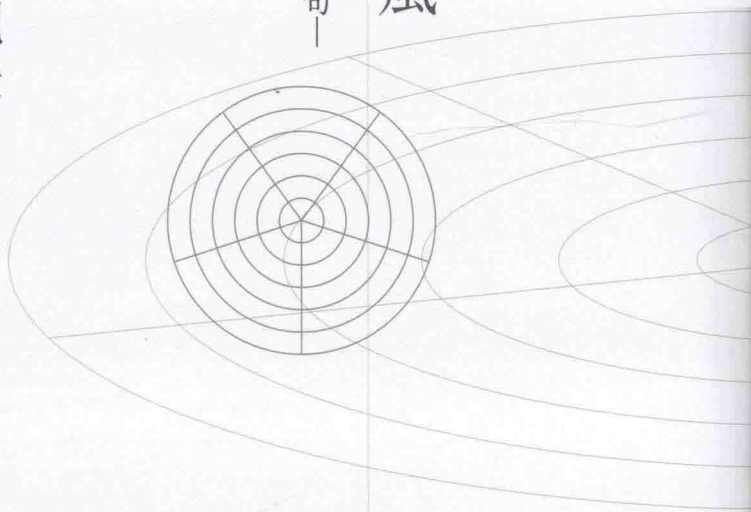


地図と風

— 旅・写真・俳句 —

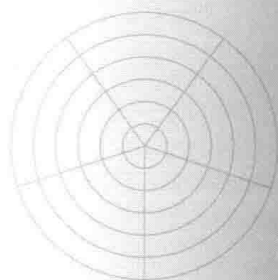
大崎紀夫



地図と風

— 旅・写真・俳句 —

大崎紀夫



ウエツブ

著者略歴

大崎紀夫（おおさき・のりお）

1940 年（昭和15 年） 埼玉県戸田市に生まれる
1963 年（昭和38 年） 東京大学仏文科卒 朝日新聞社に入社
1995 年（平成 7 年） 「俳句朝日」創刊編集長
1996 年（平成 8 年） 「短歌朝日」創刊、二誌の編集長を兼任
2000 年（平成12 年） 朝日新聞社を定年退社
「ウエップ俳句通信」創刊編集長
2001 年（平成13 年） 結社誌「やぶれ傘」創刊主宰

俳人協会会員 日本俳人クラブ評議員（財）水産無脊椎動物研究所理事

句集に『草いきれ』（04 年）、『榎櫨の実』（06 年）、『竹煮草』（Ⅰ・Ⅱ合冊、08 年）、
『遍路——そして水と風と空と』（09 年）、『からす麦』（12 年）、『俵ぐみ』（14 年）。
詩集に『単純な歌』『ひとつの続き』 写真集『スペイン』
旅の本に『湯治場』『旅の風土記』『歩いてしか行けない秘湯』
釣り本は『全国雑魚釣り温泉の旅』をはじめ、多数刊行。
他に『渡し舟』『私鉄ローカル線』『農村歌舞伎』など。

現住所 〒335-0022 戸田市上戸田 1 - 21 - 7

地図と風—旅・写真・俳句—

2014年11月30日 第1刷発行

著 者 大崎紀夫

発行者 池田友之

発行所 株式会社 ウエップ
〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-24-1-909
電話 03-5368-1870 郵便振替 00140-7-544128

印刷 モリモト印刷株式会社

※定価はカバーに表示してあります ISBN978-4-904800-16-4

地図と風＊目次

I

白地図の夢 8

書かなかった小説 19

II

スペイン市民戦争の跡を訪ねて——旅行者とアナキストと 28

カタロニア紀行 51

古い街・アルファマの路地でみつけたもの……

——ポルトガル・リスボン旧市街で暮らした一カ月 68

III

写真と時間——イメージ・トーク 80

発見された日本（インターネット） 137

Interlude

詩篇 3 戯曲 1 151

IV

大物釣り 180

釣り三昧 183

インドのこと三題 186

V

露伴の釣り 212

藤沢周平の俳句と小説の風景描写について〈講演録〉 219

あとがき 245

地図と風＊目次

I

白地図の夢 8

書かなかった小説 19

II

スペイン市民戦争の跡を訪ねて——旅行者とアナキストと 28

カタロニア紀行 51

古い街・アルファマの路地でみつけたもの……

——ポルトガル・リスボン旧市街で暮らした一カ月 68

III

写真と時間——イメージ・トーク 80

発見された日本（インタビュー） 137

Interlude

詩篇 3 戯曲 1 151

IV

大物釣り 180

釣り三昧 183

インドのこと三題 186

V

露伴の釣り 212

藤沢周平の俳句と小説の風景描写について〈講演録〉 219

あとがき 245

地図と風

—旅・写真・俳句—

白地図の夢

〔天頂〕2007年12月号

近ごろ同じ夢を三度見た。何で同じ夢なのかはわからないが、こんな夢である。

わたしは誰もいない部屋で大きな地図をひろげている。それは世界地図なのだが、日本、アジア、ヨーロッパあたりは細かく出来ているのに赤道を越えて南半球に入ると、図がはつきりしなくなる。なにやら大陸があるらしいのだが、陸と海をへだてる線も途中で消え、地名などまるで載っていない。あとは白地がひろがっているばかりである。

夢のなかのわたしは、その白地の地へ旅立つことを思い描いているのだが、その辺りで夢のシーンは急転回してわたしはいつしか砂漠地帯を歩いているのである。

目が覚めたとき、わたしは何なんだこの夢は、とひとりごちたりしているが、たいていの夢は目覚めと同時に忘れてしまうのにこの夢のことは忘れることがない。

何でこんな夢を見るのか自問してみても、無理に答えを出してみれば、旅への希求が無意

識のうちにひそんでいるということかもしれない。

旅への思いは少年のころからあった。いま思い直してみても、初めての旅は中学二年生のときのことだったようだ。秋のある日、わたしは、ギーコギーコなるオンボロ自転車に乗って国道17号線を北へ向かった。荒川のほとりの戸田町がわたしの生まれ育ったところで、昔は荒川の渡しが中仙道を結んでいたところである。その町から浦和、大宮と過ぎ、上尾、北本宿を通って吹上町に入ったあたりで、随分走ってきたな、と思った。そろそろもどった方がいいだろう。しかし、また来た道に戻るのには面白くないな、そう考えて道を左手にとって農村地帯に入ってしまった。地図も何もない勘での走りである。

秋の田園の風景はのびやかにひろがり、わたしは気分よくペダルをこいでいった。そのうちに景色は丘陵地帯となり、吉見百穴に出た。横穴古墳群といわれる暗い穴ぐらをのぞいて外に出ると、もう日暮れで、それから川越へと走り、そこから大宮を目指したときはすっかり日が暮れてしまっていた。荒川を越えるときは、浮き橋をわたった。ドラムカンと並べて浮かべた上に板をはった橋で、その橋をわたった先で店に寄った。そこでコッペパンを一個買い、それを食いながら道を走り、大宮でやっと中仙道に出た。そうして家にもどったのは夜の十時ごろだった。

そのささやかな旅は、わたしに未知の地への憧れを大きくふくらませることになったよ

うだ。大学に入ると、ひとり旅を随分とした。泊まる宿は安宿で相部屋になることも多く、各地に文通する友人もできた。

新聞社に入社すると、懐に余裕ができ、遠出もできるようになった。それでまず始めたのは村歩きである。汽車に乗って地方にいき、適当な駅でおりて、あとは適当に歩くのだ。そのころは日本列島改造論がしきりに行われていて、農村の近代化が進み、モーターゼーションの波が農村に押し寄せていた。わたしはその波に逆らうように〈村のにおい〉を求め歩いていたのである。

あるとき、渡し舟に出会った。それに乗ってみると、川をわたる数分の時間がわたしには至福の時間と思えた。川べりをゆく水の音、頭の上にひろがる空の大きさ。陸にのぼると、小さな船頭小屋には薪ストーブなどが置いてあり、壁には吉永小百合のカレンダーなどが飾られていた。そして舟を岸に繋いでやってきた船頭は、ストーブにあたってプカリプカリとキセルを吹かしたりしていて、その川原の風景はわたしには〈時代のエアポケット〉のように思えたものである。

そのときからわたしはテーマのある旅を始めた。北から南まで、つまり北海道から九州までの淡水域の渡し舟を全部見て歩き、ついで記録に残そうと考えたのである。この旅には若手写真家と組み、二年かかって百七十カ所の渡し舟を見てまわった。そしてその写真

と長短の紀行文を角川書店に持ち込んだところ、社長になったばかりの角川春樹氏が心よく出版してくれたのだった。序文は、わたしの大好きな作家、井伏鱒二先生で、いまでもわたしの自慢の種である。

そして渡し舟の旅が〈懐かしい時空への旅〉であつたように、同時並行的にわたしはしきりにひなびた温泉をめぐるようになっていた。まずは湯治場めぐりである。

これも日本全国をめぐるたが、東北の湯治場がいちばんよかったと思う。自炊棟には長逗留の人が多く、その分、そこには擬似村落共同体といったものがつくられていた。仲のいい人たちは、昼は近くの山にネマガリダケなどキノコを採りに出かけ、夜は団子を一緒に作ったりしていた。湯舟では民謡を歌い、湯から出ると縁側で三味線を弾く人もいた。昼間は「ドップの縄」で遊んでいる人たちもいた。これは参加する人数分のヒモを一本を除いて同じ長さを作り（除いた一本だけ少し長くする）、胴元がそのヒモの束の先に十円玉を、あとはバサリと畳の上に広げるのである。わたしが見たのは、そのヒモの先に十円玉を各自が置き、長いヒモを当てた人が総取りするというバクチである。これをお年寄りたちが、あれこれ助平話をしたりしながらのんびりやっているのは、またいい眺めだった。

下北半島の湯治場を訪ねたときには、そこは山中の小さな集落で、集落の中にバサマ会館という小屋のような建物があつた。そこには茶碗とか急須とかがそろっていて、集落の